

令和四年 「春の名品展」

1 「鶏図」 伊藤若冲筆 満圭裕天賛

(にわとりず いたうじゃくちゆう まんけいこうてん)

伊藤若冲（1716～1800）は江戸時代中期の画家で、京都を中心に活躍した。若冲独自の軽妙洒脱な筆致がよくでていいる。若冲は自宅の庭に数十羽の鶏を飼い、その生態をよく観察し写生することに幾年も費やしたという。鶏図を多く描いたことから「鶏の画家」とも呼ばれている。

2021年、宮内庁三の丸尚蔵館に保管されている若冲の「動植綵絵（どうしょくさいえ）」が国宝に指定され、近年注目を浴びている画家である。

賛を描いた満圭裕天（1728～1802）は、曹洞宗大乘寺四十四世住持で、寛政10年（1798）3月に大乘寺に入り、この年の冬に賛を書いた。

鶏乎驚耶 相半信疑
拋主人語 叨着一辞
鷺則転歩 鶏則報時
必有誤錯 君子訂之

戊午冬

住大乘七十一翁裕天戲題

鶏か驚か 半信半疑
主人が語るによれば ただ一語につきる
鷺則ち歩をすすめ 鶏則ち時を報ずる
必ず錯誤あり 君子これを訂す
つちのえうま冬（寛永十年・一七九八）
大乘寺四四代住持 満圭裕天
七十一歳 戯れに題する

2 「牡丹折枝図」 寺島応養筆

(ぼたんおりえだず てらしまおうよう)

3 「碧牡丹想思鳥之図」 寺島応養筆

(あおぼたんそうしちょうのず てらしまおうよう)

寺島蔵人の遺作は山水図と竹石図が大部分を占め、花卉図はごく少ない。「写吾園中花」とあることから寺島家の庭にはボタンがあったことがわかる。蔵人はボタンを好んだといわれ、遺愛品のも鐙や茶器などにボタンの図柄のものがある。

4 「漁楽図」 寺島応養筆 (りょうらくず てらしまおうよう)

漁楽図の主題は漁に興じる人々を描くところにあるが、その漁の様子が山水の景観に溶け込んでいる。山、岩、樹木の描法は、蔵人愛蔵の池大雅筆「杜日図」の描法と軌を一にしており、蔵人はこの作品を座右において模範としたのであろう。